

[講演会抄録]

2014年 現代史研究所連続研究講座

戦後日本首相の外交思想 第4回 中曽根康弘首相の外交思想 ——歴史認識を中心として

2014年7月3日

服部 龍二（中央大学 総合政策学部 教授）

はじめに

ただいま、増田弘先生から非常に丁寧に御紹介をたまわりました、服部龍二と申します。本日はどうぞよろしくお願ひいたします。こちらのキャンパスは初めて来させていただいたのですけれども、実は私の祖母が貴学の出身でありまして、何となくそうした御縁を感じています。

さて、増田先生のお話ですと、前々回が佐藤栄作、前回は福田赳夫ということでした。今回の中曽根康弘は、1980年代に5年ほど首相を務めた方です。30回ぐらいインタビューさせていただきまして、いまでもお元気でいらっしゃいます。

中曽根首相の外交で一番有名なのは「ロン・ヤス関係」だと思います。アメリカ大統領ロナルド・レーガンと中曽根の関係が「ロン・ヤス関係」と呼ばれ、日米関係を強化したわけです。「不沈空母」とされる発言もありましたし、サミットで非常に重要な役割を果たすなど、中曽根は米ソ核戦略への対応を含めて、世界戦略のようなものを持った希有な政治家だったと思います。日本の首相というのは、欧米、中国、韓国、東南アジアぐらいまでは視野に入れるとしても、さらに中近東や東欧にまで目を向けた方は、そんなにいないかもしれません。

小泉純一郎首相、あるいは、いまの安倍晋三首相もそうかもしれませんが、歴代首相はアメリカとの関係、日米同盟を軸として、対外政策を展開していくわけです。そこにアジア外交、とりわけ韓国や中国とも親しく近隣外交ができることを条件に付け加えますと、該当する首相はそれほど多くないような気がします。

例えば大平正芳は田中角栄内閣の外務大臣として中国との国交を樹立し、その前には池田勇人内閣の外相としても「大平・金メモ」という経済協力方式で日韓交渉を打開しました。首相としても、アメリカ大統領カーターや中国と関係をよくしています。

それをより全面的に展開したのが中曽根さんだったように思います。つまり、アメリカとの関係はもちろん重要だけれど、韓国や中国とも非常によかった。ソ連との関係は進展しなかったものの、それを除くと主要国と全部関係がいい首相というのは、なかなかいないでしょうね。「ロン・ヤス関係」は中曽根外交の柱ですけれども、よく知られていますので、韓国や中国との関係を中心にお話しようかと思っています。

首相として初の訪韓

そんなわけで、東アジア外交を中心にお話しします。これが示唆的なのは、いわゆる歴史認識問題というのがありますね。教科書や靖国参拝について、中曽根内閣のときにも大いに問題になっていました。

それよりも重要なことは、歴史認識の問題があつたにしても、韓国の全斗煥大統領、中国共産党総書記の胡耀邦と関係が非常に密でありまして、難しい歴史認識の問題を乗り越えたことです。何度も首脳会談を開いて、信頼をむしろ増していった。韓国や中国の側にも、日本の首脳と真剣に向き合った。それが今日と大きく違う点です。

就任した当初、中曽根首相はタカ派と目されていて、不安視する向きもあったのですが、非常に現実的な外交を繰り広げました。首相

として太平洋戦争を侵略とはっきり認めたのも中曽根さんが最初で、その認め方も次第に明確さを増すようになってきたのですね。

また、中曽根首相は「戦後政治の総決算」を掲げました。吉田茂などが築いた保守本流があり、前々回の佐藤栄作はまさにその保守本流ですが、中曽根さんはそれと違って、吉田茂、佐藤栄作という保守本流を批判する側の立場だった。革新保守と呼ばれるものです。

中曽根首相は最初の外国訪問に韓国を選びました。1983年1月、日本の首相として初めて訪韓したわけです。中曽根首相は全斗煥大統領との会談で、「我が国と最も近い韓国との関係を改善するため、先ず貴国を訪問し懸案を解決したいと決心したが、それが実現できてうれしい」と語っています。

全斗煥大統領は、「被害者はいつまでも被害を受けたことを忘れないが、加害者は害を加えたことをすぐ忘れてしまう。中曽根総理の今回の訪問を契機としてこのような面を緩和していく必要があると考える。今後は心を寛容にして、互いに兄と弟とも言えるような関係としていきたい」と言っています。

過去の問題、わだかまりをどう解きほぐしていくかが、非常に重要になっていくわけです。中曽根首相はスピーチの半分ほどを韓国語で行いました。

今度は全斗煥が1984年9月、韓国の大統領として初めて来日します。昭和天皇が宮中晩餐会で、「我が国は、貴国との交流によって多くのことを学びました。例えば、紀元6、7世紀の我が国の国家形成の時代には、多数の貴国人が渡来し、我が国人に対し、学問、文化、技術等を教えたという重要な事実があります。永い歴史にわたり、両国は、深い隣人関係にあったのであります。このような間柄にもかかわらず、今世紀の一時期において、両国の間に不幸な過去が存したことは誠に遺憾であり、再び繰り返されてはならないと思います」と述べています。

全斗煥大統領は、「両国の間にあつた不幸な過去は、今やより明るく、より親しい未来の開拓の上で貴重な^{いしずえ}礎にならねばならないと信じています」と応じています。

全斗煥が首脳会談で、「陛下は、両国の過去の歴史に言及されたが、私は韓国国民を代表して厳粛な気持で傾聴した」と語ると、中曽根首相は、「私の外交は、手づくりで、人間と人間の心を大事にするものであり、国家間とはいっても、互いの政治指導者の友情が重要である」と強調しています。当時の『韓国日報』論説委員は、「今回の訪日は歴史的な大事件であり、日本の対応よろしきを得て成功をおさめた。お世辞ぬきで90点はつけてよい。しかし問題はこれからである」とソウルの日本大使館員に語っています。

お言葉については、中曽根首相が富田朝彦宮内庁長官に「遺憾を入れよ」と指示しています。消極的だった宮内庁、外務省の反対を押し切って、「遺憾」という言葉を入れたのです。

中曽根と中国

中国共産党の総書記は胡耀邦で、趙紫陽総理とともに鄧小平体制を支えていました。中曽根首相は胡耀邦総書記と、1983年、84年、86年と3回会談しています。2人の交流は1980年代の日中関係を象徴していて、1984年ごろが日中関係2000年で最良の時期といわれています。

その少し前、1982年には歴史教科書問題があって、少し冷え切っていた時期もありました。それをどう克服したのでしょうか。中曽根さんは非常に外交的な力があって、以前から中国に何度も足を運んでいます。1973年には通産大臣として訪中しまして、周恩来総理と長く会談しています。これが大臣として最初の訪中ですけれども、すでに中曽根さんは1954年に中国を訪れています。モスクワ経由で北京へ入って、天津などを10日ほど視察しました。

中曽根さんは1980年にも訪中しています。胡耀邦さん、趙紫陽さん、さらに鄧小平さんと会っています。鄧小平さんは1978年、福田内閣のときに来日して、日中平和友好条約の批准書を交換するわけですが、そのときに中曽根さんは自民党総務会長として会っているのです。首相になって、すぐ外交といってもなかなか難しいですので、以前から準備していて、首脳とも面識があったことは先触れになりました。

日中「相互信頼」

胡耀邦総書記が1983年11月に来日し、中曽根首相と会談します。中曽根首相は日中友好21世紀委員会という民間交流の組織を提案しました。胡耀邦さんは、「一部に軍国主義復活を望む者がいる」と前置きしながら、「中曽根総理はじめ歴代総理並びに日本の指導者はすべて、日中の永遠の平和友好関係を希求していると信じる」と応じています。

このとき日中関係4原則を決めています。それまでは、「平和友好、平等互惠、長期安定」という3原則だったのですが、中曽根首相は「相互信頼」を加えたいと提案しまして、胡耀邦総書記の同意を得ました。胡耀邦さんは、「中国では四という数字は『事事如意』と言い、縁起が良いので賛成である」と首肯しているのです。

中曽根さんは、「青年交流を重視しており、今後、中国からの青年招聘計画等を相当程度拡大させたい」、「第2次円借款は、目下事務レベルで検討中だが出来る限り早く結論を出したい」と意欲を示しています。

日中が接近したということは、もちろん中曽根、胡耀邦の信頼関係、ケミストリーが大いにありますけれども、外的な要因にも触れておきましょう。端的に言ってソ連要因、つまり対ソ戦略を日中が共有していたということです。中曽根首相からすると、冷戦を勝ち抜くためにも日中関係を強化したいという発想があるわけです。当時ソ連がアジア極東に配備したSS-20についても、中曽根さんは胡耀邦さんと意見を交わしま

した。

中曽根さんが、「率直なお話に感慨深い。閣下は確かにまことに率直だ。私の兄貴分になれる」と語りかけると、胡耀邦さんは、「我々はよい友達だ。我々は80年代最初の年に知り合ったが、90年代にかけて、更には生きている最後の1日まで友人でいたい」と共鳴しました。中曽根さんは、「2000年には閣下は85才、私は82才であり、その時まで生きていこう」、「2人で日中友好を見届けよう」と会談を結びました。

胡耀邦さんは西日本を中心に視察し、最後は長崎で記者会見を行って、「今回の訪問は私の人生のなかで歴史的意義をもつ極めて印象深い外国訪問であった」と言っています。胡耀邦さんは日本体験を通じ、対日重視を揺るぎないものにして、中曽根さんとの関係が家族ぐるみになろうとしていました。

1984年3月には、今度は中曽根首相が北京を訪れます。趙紫陽総理と会談しまして、中曽根さんが残留孤児について謝意を表明し、軍国主義的な考え方を持っていないと説明します。趙紫陽さんは、「中曽根内閣の防衛政策は理解している。胡総書記訪日後は、特にそうである。中曽根内閣の政策を軍国主義政策とは考えていない」と受け止めています。

胡耀邦さんは中国の外交の本質は何かということについて、独立自主の外交ということを書いて、「その本質は非同盟ということである」と述べています。中国はソ連との関係改善を希望しているけれども、なかなかうまく進んでおらず、それだけに日本との関係、経済協力などが重要でした。日本の経済協力に関して胡耀邦さんは、「貴国の経済、技術の御支援に非常に感謝する」、「中国はあなた方の厚い友情を決してわすれることはないであろう」と率直に語っています。中曽根さんは、第2次円借款の増額を告げました。

鄧小平さんは、対ソ関係を改善するには3つの障害があると語っています。3つというのは、中ソ国境やモンゴルに駐留するソ連軍、アフガ

ニスタン侵攻、カンボディア駐留ベトナム軍を指します。

1984年9月になりますと、胡耀邦は約束通りに日本から3000人の若者を招待します。建国35周年の国慶節に招待してくれたのです。皆さんのような若者が、多く中国を訪れたわけです。日中関係で最良の時期といわれました。

靖国神社の公式参拝

ここまでは、韓国、中国との関係がよかった話を中心にしました。次に悪化した面です。まず挙げねばならないのは、靖国神社の公式参拝であろうと思います。

中曽根首相まで歴代首相は、東久邇宮稔彦、幣原喜重郎、吉田茂、岸信介、池田勇人、佐藤栄作、田中角栄、三木武夫、福田赳夫、大平正芳、鈴木善幸と、ほぼ皆さん参拝していました。今上天皇は参拝を控えていますけれども、昭和天皇も8回ほど参拝しました。

いわゆるA級戦犯の合祀ということが、いつ行われたかご存じでしょうか。1978年10月に合祀されたのです。このときの総理大臣は福田さんです。翌年には大平首相、その後も鈴木首相が参拝していて、中国、韓国から批判はなかったのです。

中曽根政権が成立して、首相として何度か参拝しますけれども、しばらく中韓から非難はありませんでした。反発を招いたのは、1985年8月15日の公式参拝でした。中曽根首相としては憲法問題を解決して、公式参拝の道を開こうとしたのですが、かえって今日的な意味での靖国問題の起原になってしまいました。

中曽根さんが中国を軽視したかといえば、そうではありません。参拝の前月、つまり1985年7月に自派の野田毅議員が日中協会理事長という立場で中国を訪れています。野田議員は、中曽根首相が公式参拝するけれども、波風を立てないようにしてほしいと告げるわけです。相手は

呉学謙外交部長と孫平化中日友好協会副会長でした。

野田議員は「二百数十万人の英霊うち、A級戦犯はわずかに14人ではないか。メインは明らかでしょう。参拝できなければ、国民からの反発は避けられない。戦争で亡くなった方への慰霊が、中国の反対でできなくなってはよくない。目をつぶってくれないか」と述べます。

孫平化副会長が、「あなたの話は理解する。だが、日本に日本人の感情があるように、中国にも中国人民の感情がある。たしかに靖国に祀られるA級戦犯は一握りにすぎないが、公式参拝したら中国人民は収まりがつかない」と反論しました。

野田議員が帰国報告すると、中曽根首相は、いわゆるA級戦犯の分祀を参拝前に模索しているのです。

関係修復へ

ここからが重要なのですけれども、公式参拝で関係がこじれると、日中ともに修復を求めています。昨今であれば首脳会談を控えて、リスクをとらないのが現状ですけれども、当時は逆でありました。

中曽根首相は、まず秋の例大祭を見送り、分祀を模索いたします。そして、安倍晋太郎外相が北京を訪れるときに、「靖国問題については中国側と政治決着をせよ」と命じました。中曽根さんは、「靖国の例大祭には行かないが、年1回の慰霊祭にはクレームを付けないというラインで、この際、紳士協定を中国側と作りたい」というのでした。しかし鄧小平さんは、「今後も靖国参拝をしないで欲しい」と安倍外相に伝えました。

胡耀邦さんは、「4つの意見」を日中友好21世紀委員会の委員たちに述べています。第1に、中日友好関係の発展は両国国民の根本的利益である、第2に、両国が対抗した歴史を正しく扱わねばならない、第3に、中日友好には両国の堅忍不拔な努力を要する、第4に、中日友好におけ

る最高の目的は子々孫々の友好実現である、というものでした。歴史問題で注文を付けながらも、対日重視の姿勢は変わりませんでした。

中曽根首相は10月に訪米します。ちょうど国連40周年記念であったわけですが、趙紫陽総理と会談しまして、「日中共同声明、日中平和友好条約、4原則の下に不動の精神をもって日中協力を促進していくというのが私の確固たる立場である」と強調しました。

翌1986年になりますと、7月に衆参同日選挙がありまして、歴史的な大勝を取め、第3次中曽根内閣を成立させます。中曽根首相は8月15日の参拝に執念を燃やして、親しかった稲山嘉寛経団連元会長と香山健一学習院大学教授を介して、北京の意向を探っています。中国側の回答はやはり「ノー」でした。胡耀邦総書記は、「もし、今年参拝があれば、中国人民を抑え切れない」と述べ、自粛を要請しました。

当時、第2次歴史教科書問題が起きていたのですけれども、胡耀邦さんは香山さんを通じて、「今回の教科書問題で中国の国民感情に慎重に配慮された中曽根総理の御努力に対する深甚の敬意」、「靖国神社公式参拝問題での総理の慎重な姿勢に対する敬意と期待」を伝えているわけです。中曽根さんは、そうした中国側の意向にも配慮して、靖国神社に参拝しないと中江要介駐中大使から劉述卿外交副部長に伝えさせています。

ここで中曽根さんは、胡耀邦さんに向けて親書をしたためています。「私の実弟も海軍士官として過般の大戦で戦死し、靖国神社に祀られています」としながらも、「侵略戦争の責任を持つ特定の指導者が祀られている靖国神社に公式参拝することにより、貴国をはじめとするアジア近隣諸国の国民感情を結果的に傷つけることは、避けなければならないと考え、今年は靖国神社の公式参拝を行わないという高度の政治的決断を致しました」というものでした。胡耀邦さんは、返書を送っています。

中曽根・胡耀邦の関係というものは、歴史認識問題を乗り越え、

乗り越えようと努力を重ねたことが非常に重要だったのではないかと思います。中曽根さんは、親日とされた胡耀邦さんの立場を弱めないためにも、参拝中止を決断したわけです。

歴史教科書問題と藤尾文相の罷免

先ほど少し触れた第2次歴史教科書問題というのは、中曽根内閣時の1986年5月、文部省が超法規的措置で40カ所に修正を要求し、38カ所を書き直させたものです。元国連大使の加瀬俊一さんが、原書房の日本史教科書を編纂しまして、中国、韓国から復古的との批判が寄せられました。

中曽根内閣は機敏に対応します。海部俊樹文部大臣、後藤田正晴官房長官に指示をして、文部省が「壮士安重根」を「指導者安重根」に直すなど、4回にわたって修正を求めています。海部文相は検定制度の立場からも、すぐに修正を受入れなかったようですが、中曽根首相がそれを押し切り、超法規的措置で教科書を改訂します。

もう1つ、藤尾文相発言というものがありました。藤尾さんは海部さんの次の文部大臣です。その藤尾さんが、東京裁判や韓国併合について問題とされる発言を行い、『文藝春秋』などで報道されました。中曽根首相は辞任を求めましたが、藤尾文相は辞めなかったため、最後は33年ぶりの罷免となりました。このときも中国側の反応は比較的抑制的でした。

この直後に中曽根首相はソウルを訪れました。アジア競技大会の開会式に出席するため、全斗煥大統領と会談しました。中曽根首相は、「一部の閣僚に妥当を欠く発言があったことは遺憾と考える。自分（総理）としては、この発言を深刻かつ重大に受け止め、罷免措置をとった次第である。〔中略〕自分（総理）は貴大統領と親友であり、本日お目にかかるのを楽しみにして韓国に来た」と述べました。

全斗煥大統領は、「自分（大統領）も貴総理を親友と考えており、今回の訪韓を心から歓迎する。〔中略〕貴総理が1983年就任直後に最初の外遊として初めて韓国を訪問されたことをハッキリと記憶しており、この貴総理の政治家としての勇気と決断に敬意を表するものである。このおかげで自分（大統領）はその翌年（1984年）初めて日本を訪問することができた」と言っています。

このとき全斗煥大統領は、「両国の関係は、一気によくなるというわけではないが、従来の『近くて遠い関係』から『近くて近い関係』に発展するとの見込みが出てきた。日韓関係は新しいチャプターに入りつつある」と説明しています。

結びに代えて

最後の中曽根・胡耀邦会談は1986年11月でした。このとき中曽根首相は訪中しており、胡耀邦総書記が、「両国関係に満足している。中曽根総理が日中両国関係の発展に新たな貢献をされたことを私達は称賛している」と迎えました。中曽根首相は、「両国は歴史、体制を異にしているが、この両国が協力していけば、アジアひいては世界の平和・安定に大きく貢献する」と応じました。藤尾文相発言、歴史教科書問題、靖国問題には触れていないようです。

この訪中で中曽根首相は、皆さんのような方々が中国と交流できるように日中青年交流センターを作っているのです。交流センターの定礎式に出席して、壇上から中国の青年たちに、「私もまた、『青年の心』をもって、日中友好関係の促進と国際社会の平和と繁栄の維持という意義ある事業の成功のため、全力を傾ける決意であります」と語りかけています。中曽根さんは熱弁を振るいましたが、2カ月後に胡耀邦さんは失脚します。それとは対照的に中曽根さんは1987年11月、竹下登自民党幹事長を後継総裁に指名して、悠々と退陣しました。一時代を築いた中曽根・

胡耀邦関係ですけれども、最後は大きく明暗を分けました。

以後、それに匹敵するような友情が日中関係に築かれることはなかったと思います。おそらく皆さんの世代だと、1990年代半ば生まれぐらいでしょうか。福田康夫首相と胡錦濤主席の関係を除けば、日中関係がよかった記憶はほとんどないという実感かもしれませんね。

この時期の日中関係が良好だった要因を3つにまとめたいと思います。第1に、対ソ戦略を共有していたことです。第2に、日本の経済援助が増額され、軌道に乗っていたことがあります。第3に、中曽根首相と胡耀邦総書記が強い信頼関係で結ばれていました。

いろいろな問題があったけれども、重要なのは問題があったということよりも、日本と中国、韓国の指導者が勇気を持って、摩擦を乗り越えようと努力を重ねたことです。実際、ある程度乗り切ったところがあると思います。困難な問題はあったけれども、むしろ絆を強めた感もあります。

このように、よかった時期もあったことをぜひ知っていただければと思います。中曽根・胡耀邦関係の以降に盛り上がったという意味では、1992年の天皇訪中もありますし、日本は天安門事件後に中国が国際社会から孤立しないように腐心したのですね。

今日は中曽根首相の外交思想というテーマでお話ししてまいりました。アメリカだけでなく、中国、韓国との関係も良好にしえた政治家がかつていたし、そのことは今後も大きな示唆を与えてくれるように思います。御静聴に深謝申し上げます。

司会 どうもありがとうございました。おそらくここにいる学生の皆さんもそうじゃないかと思ひまして、代わって質問を一点だけさせてもらいます。靖国問題の際の分祀ということに関して、中曽根さんはどういう考えを持っていたのでしょうか。

服部 中曽根さんは靖国の分祀を模索してしまして、野田毅議員、島村宜伸議員などを通じて、何度も靖国に働きかけています。靖国神社の側で、合祀を執り行ったのは松平永芳宮司でした。

この点の中曽根さんにインタビューしたことがあります。首相として、松平宮司にも直接会って、分祀を申し入れたそうです。総理大臣が参拝できることも重要ですが、天皇が参拝できるようにしたかったそうです。天皇が参拝しなくなった理由については、正確には知らないが、合祀に原因があるのだろうと感じていたそうです（中曽根康弘/中島琢磨・服部龍二・昇亜美子・若月秀和・道下徳成・楠綾子・瀬川高央編『中曽根康弘が語る戦後日本外交』新潮社、2012年、352-353頁）。

元宮内庁長官だった富田朝彦のメモにも出てまいりますけれども、昭和天皇も合祀が気掛かりで、参拝することができなくなったようです。「親の心子知らずだね」というふうなことを言っていますけれども、「親」というのは松平永芳の父、慶民のことですね。

司会 どうもありがとうございました。

〈付記〉本稿は講演記録のため、分かりやすく表現を改めたところがあります。正確な引用や出典につきましては、拙著『外交ドキュメント 歴史認識』（岩波新書、2015年）を参照していただければ幸いです。